

(算数科)

お互いの良さを生かしながら、ともに学び合う子どもの育成

～自他を大切に学習活動の工夫～

大阪市立栄小学校 亀田剛士 藤原孟也 三輪竜也

1. 研究主題設定の理由

本校では、「自他を大切にし、夢と希望の実現に向かって取り組む子どもを育てる。」を学校教育目標とし、すべての教育活動において、人権を基底に取り組んでいる。

研究活動として、本校はこれまで、コミュニケーション能力の育成やキャリア教育に取り組んできた。その中で、自分の考えを自由に表現し、伝え合うことのできる子どもの育成に力を入れてきた。そこから、学び合いの考えを取り入れ、昨年度は研究主題を、「お互いの良さを生かしながら、ともに学び合う子どもの育成」とし、教科を限定せずに、指導者の柔軟な発想で取り組み、学び合い活動についての共通理解を図った。しかし、教科を限定しないことで、学び合い活動の良さについては捉えることができたものの、教科の特性の影響が大きく、学び合いの質が変わることが多く、系統だてることが困難であった。そこで、平成28年度は、研究主題はそのままに、教科を算数科に限定した。その理由として、①学習過程が各学年共通していること、②考える場面において学び合い活動を取り入れやすいこと、③形成的評価により、取り組みの成果が見えやすいことなどが挙げられる。課題設定やふり返りを見直し、確かな学力を身につけるとともに、自分の思いや考えをもち、それを伝え合い、ともに学ぼうとする児童の育成を目指し、研究を進めた。

2. 研究の視点

本年度の研究にあたって、次の3点を研究の視点として、研究主題に迫ることとした。

課題提示の工夫

○ 自分事として捉えられる学習課題を提示する

- ・ 子どもが興味・関心をもちやすい身近な事象から課題を見つけ、「どうして？」と疑問を持つもの、「やってみたい！」と欲求を沸かせるものなど、学習の必要性に気づかせ、主体的に取り組むことのできる課題を提示する。
- ・ 「全員が～～できるようになろう」や「自分の～～を説明しよう」など、学び合い活動につながるめあてをもたせ、協働的に取り組むことができるようにする。
- ・ 評価を適切に行い、指導者が子どもの学習到達度を捉え、より子どもに合った学習課題を提示するとともに、子どもが的確に自己理解できるようにする。

学び合う場の工夫

○ 個人で考える時間を十分にとる

- ・ 個人で考える時間を十分にとり、全員が自分の考えをもてるようにする。その上で、自分の考えが確かなものか、自分は何がわかっていて何がわからないのか、認知できるようにする。

○ 学び合う場の設定を工夫する（学習形態・学習方法の工夫）

- ・ ペア、グループ学習やジグソー型、ミニ先生など、実態や教材に適した学習形態を取り入れ、子どもが交流したり、学び合ったりする協働的に取り組むことができる場を設定する。

ふり返りの工夫

○ 学習課題と学び合い活動についてふり返りを行い、次の学習に活かせるようにする

- ・ 本時の学習課題と学び合い活動に分けて、ふり返りを行う。
- ・ 学習課題のふり返りでは、形成的評価を適切に行い、学習到達度を指導者および子ども自身も捉えられるようにする。
- ・ 学び合い活動のふり返りでは、「できた、わかった、楽しかった、うれしかった」などの感想や心情面での変容を文章などでふり返る。
- ・ 次時の冒頭で、感想などの紹介を行い、意欲を高める。

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 自分事としてとらえられる課題として、実生活で見られるもの・ことや、興味・関心の高いものを素材として、子どもにとって、より身近に感じられる問題場面を設定したことにより、学習意欲の高まりが見られた。また、提示の際に、実物を見せたり、ICT機器を用いて、写真や音声、動画などで表したりしたことで、子どもは問題場면을具体的に捉えることができ、課題に主体的に取り組むことができていた。学び合い活動につながるめあてについては、単元ごとに設定し、毎時間同じ項目についてふり返らせることで、常に学び合い活動を意識させることができた。
- 学年の実態に応じて、個人で考える時間を十分にとることで、自分の考えをもつことができていた。その結果、学び合う活動においても、自分の考えを積極的に友だちに伝えることができていた。考える段階の後半において、実態や教材に適した学習形態を工夫し、ペア学習、グループ学習を効果的に取り入れたことで、協働的に学ぶ姿が見られた。伝え合うだけにとどまらず、お互いの考えを受けとめ、説明・質問しあい、意見を交わすことができていた。
- 学習課題のふり返りでは、自分が何ができたかを認知し、「次はこれがんばろう。」と次時の学習に活かすことができた。学び合い活動のふり返りにおいて、「効率よく計算する方法がわかった。」「～～さんから教えてもらって分かった。」など、肯定的な自己評価ができていた。また、ふり返りカードの内容を、他者からの評価として、次時に紹介、称賛したことで、意欲が高まり、学級全体の学び合いに対するモチベーションが上がり、「めざせ、全員パーフェクト!」という学び合い活動のめあてが子どもの声から生まれたこともあった。そのめあてを受け、「間違えないように、気をつけて計算したい。」「繰り上がりに気をつけよう。」と自分の学習内容をあらためてふり返る子どももいた。学習課題と学び合い活動のふり返りがあることで、より肯定的な評価と意欲の喚起につながった。

(2) 今後の課題

- 学び合い活動の良さを体感し、その経験を積み上げることによって、主体的に学び合おうとする子どもの姿が見られた。今年度の実践を深化、充実させ、主体的・協働的に学ぶアクティブラーニングに結びつけていく。
- ICT機器を意図的、計画的に組み入れ、子どもの主体的、協働的な学びを支えるツールとしての活用方法を模索していく。